

# 北京人にとっての「漢語規範化」

——《老舍短編小説選》における北京方言語彙の改訂を通して——

The Chinese Standardization for Peking People

倉橋幸彦

Yukihiko Kurahashi

## 0. はじめに

《老舍短編小説選》(1956・10 人民文学出版社)は、老舍の短編小説のテキストとしては異本である。そのことは、先に発表した<「十三篇」の“古董”——『老舍短編小説選』について——>(《中文研究集刊》第2号 1990・3・30)で取り上げた。そこでは、《老舍短編小説選》の内容に関わる異同だけを問題にしたが、同書には表現上の異同があることにも簡単に触れておいた。内容上の改訂が削除を主としたのに対し、表現上の改訂には書き換え・挿入・削除によるさまざまな異同がみえる。

ところで、《老舍短編小説選》の改訂作業がなされたと思われる56年前半期といえ、<sup>(1)</sup>「普通話」の普及(「漢語規範化運動」)が盛んに提唱された時期である。当時老舍は、その「普通話」の普及を正式に提議した「全国文字改革会議」(1955・10・15～23)に出席して発言、翌年には「中央推広普通話工作委員会」の副主任にも任命され、「漢語規範化運動」を支持する活動<sup>(1)</sup>を積極的に行っている。

これらの老舍の活動が、同時期になされた《老舍短編小説選》の改訂にも当然のことながら反映されているはずである。例えば、「副詞／形容詞＋的＋謂語」の「的」の削除<sup>(2)</sup>などはそのひとつであるし、語彙の規範化もかなりの程度行なわれている。そのことは、「漢語規範化運動」が本格化していない時期に出版された《駱駝祥子》(1955・1 人民文学出版社)の改訂と比較してみると、より明らかにされるはずである。

《老舍短編小説選》における字句の異同は、もちろん老舍自身の表現の推敲(より読みやすくを旨とする)を知る上で興味深いばかりでなく、従来あまり問題にされなかった北京人にとっての「漢語規範化」を考えてみる格好の資料ともいえよう。

さて、本稿では《老舍短編小説選》の字句の異同のなかより、北京方言語彙の改訂について取り上げることにする。それは、老舍が「漢語規範化」を推進する活動において、「北京土語」の乱用をしきりに戒めており、その発言の具体的な内容を《老舍短編小説選》の改訂を通して知りたいからである。また、解放後に出版された北京方言辞典が老舍の作品を引用資料としていることは周知のことである。しかし、短編小説に関しては大半が《老舍短編小説》をテキストにしており、改訂前の北京方言語彙及びその用例が従来の北京語辞典には採られていないからでもある。

---

平成3年7月18日原稿受理

大阪産業大学 教養部

## 1. 北京方言語彙に関する改訂

ここでは、《老舍短編小説選》所収の十三篇を収める初版本をテキストにして、《老舍短編小説選》における北京方言語彙の改訂の例を挙げてみる。<sup>(3)</sup>

テキストは、〈馬褲先生〉(馬)・〈微神〉(微)・〈柳家大院〉(柳)・〈黑白季〉(黒)が《趕集》(1934・9・20 良友図書印刷公司)、〈上任〉(上)・〈犠牲〉(犧)・〈柳屯的〉(屯)・〈善人〉(善)・〈月牙兒〉(月)が《桜海集》(1935・8 人間書屋)、〈老字号〉(老)・〈断魂槍〉(断)・〈且説屋裏〉(且)が《蛤藻集》(1947・3 5版 開明書店)。なお、〈不成問題的問題〉は初版の《東海巴山集》ではなく《老舍文集》(1948・1 春明書店)<sup>(4)</sup>に基づいて校勘を行ったが、北京方言に関する改訂はみられなかった。

北京方言語彙の認定には、以下の辞典を引いておいた。

- 《語彙》：金受申編《北京話語彙》(1965・3 修訂3版 商務印書館)
- 《例釈》：宋孝才・馬欣華編《北京話詞語例釈》(1982・1 鈴木出版)
- 《方言》：陳剛編《北京方言辞典》(1985・9 商務印書館)
- 《詞語》：傅民・高艾軍編《北京話詞語》(1986・8 北京大学出版社)
- 《匯釈》：宋孝才編《北京話語詞匯釈》(1987・9 北京語言学院出版社)
- 《土語》：徐世榮編《北京土語辞典》(1990・4 北京出版社)
- 《兒化》：賈采珠編《北京話兒化詞典》(1990・9 語文出版社)
- 《現漢》：《現代漢語詞典》(1983・1 商務印書館)
- 《難詞》：呂才楨・白玉昆・白林編《現代漢語難詞詞典》(1985・11 中国延辺教育出版社)
- 《現漢補》：《現代漢語詞典補編》(1989・4 商務印書館)
- 《岩波》：倉石武四郎編《岩波中国語辞典》(1989・5・25 岩波書店)

### 1.1 書き換え

北京方言語彙の書き換えについては、「北京土語」を「普通話」に書き換えたものに限定せず、他の北京方言語彙で書き換えた例も含めることにする。<sup>(5)</sup>

また、取り上げた北京方言語彙が1955年版《駱駝祥子》(《駱駝55》)にも用いられている場合には、その改訂についても触れておくことにする。

なお、引用文の後の( )に、作品の略称と《老舍短編小説選》のページ数と行数を示しておく。

#### 1.1.1 名詞

##### ① 「蹦兒」→「刺兒」

“夥計們，還得捧我尤老二呀，找沒什麼蹦兒(→刺兒)的弄吧——活該他倒霉，咱們多少露一手。……咱們就這麼辦，先找小的，不刺手的辦。” (上 53-13)

「蹦兒」は、普通「見込み、能力、方法」の意味で用いられ、《例釈》・《方言》・《詞語》・《匯釈》・《土語》・《兒化》・《漢補》（＜方言＞）に収められる。《岩波》は下の2。ただし、上例の「沒什麼蹦兒的」は以下の「小的，不刺手的（手を焼かない，てごわくないもの）」という意味。このような「刺兒」という意の「蹦兒」はめずらしい例である。

参考までに老舎の他の「蹦兒」の例を挙げておく。

“你，就凭你，還有什麼蹦兒?!” <牛天賜伝>（《老舎文集 第二卷》477-7）

《駱駝55》では、「蹦兒」のままで「本領，前途」と注する。

“一個人能有什麼蹦兒?” (207-12)

② 「当事兒的 (dāngshīrde)」→「管事兒的」

肚量既大，而且得吃口当事兒的（→管事兒的）； (断 17-8)

《岩波》は、「当事兒的」を下の1とする。また、《中日大辞典》(1976・2・1 四版)は「当事兒」を「役だつ」と解し、「喫口当事兒的」（すこし腹にたまる物を食べる）を引く。

《老舎短編小説選》は、「管事兒的」に書き換えさらに“有榮養，吃了不至於不久又餓的”と注する。なお、「管事兒」も《土語》・《兒化》に収められる北京語。

③ 「吊死鬼 (diàosǐguǐ)」→「死鬼」

老王又有了高招兒，兒媳婦變成吊死鬼（→「一死」），他更看不起女人了。四五十塊花在吊死鬼（→死鬼）身上，還叫她娘家拿走四十多，真堵得慌。 (柳 119-21)

前者（「變成吊死鬼」→「一死」）は、語彙の範囲を超えて表現上の書き換え。

「縊死者」を意味する「吊死鬼」は《土語》・《兒化》に収められる。《岩波》では下の1。因に《方言》では「みのむし」を意味する「吊死鬼」を採り、《岩波》ではこれを下の3とする。

ただし、この書き換えは上例のみ。他では「吊死鬼（兒）」のまま。

這些個事叫他越想越氣，真想咬吊死鬼兒幾塊肉才解氣！ (柳 117-6)

要不然屋裏放着吊死鬼，才不像句話。 (柳 117-22)

“要不然我把吊死鬼搬到你屋裏來。” (柳 118-9)

真要再來個吊死鬼，可得更吃不了兜着走了。 (柳 119-1)

④ 「哥兒（倆）」→「兄弟（倆）」

他們哥兒倆→他們兄弟倆 (黒 1-1)

この書き換えも上例のみ、他では「哥兒倆」のまま。

這哥兒倆的不同正如他們的外号——黒，白。 (黒 1-6)

“他們哥兒倆的勁兒——心裏的勁兒——不一樣。” (黒 11-22)

《兒化》は「哥兒倆」を、《土語》は「哥兒」を採る。なお、「哥兒」は《岩波》は下の1とするが、《現漢》にも採られている。

因に、「爺兒倆」・「娘兒倆」は書き換えられていない。

還就是我們爺兒倆和王家可以算老住戶，……。 (柳 110-12)

眼看太陽就落下去，四外沒有一個人，只有我們娘兒倆。 (月 130-3)

⑤ 「“個兒”」→「對手」

沙子龍也不是“個兒”→沙子龍也不是他的對手。 (断 23-14)

《方言》・《土語》が「對手（好敵手）」の意味で「個兒」を採る。「個兒」は、「背たけ、物の大きさ」という意味で普通用いられるので、老舎は初版でも“ ”で括ったのであろうか。《中日大辞典》は<俗語>とする。

なお、「断魂槍」では初版より「對手」を用いている箇所もある。

沙子龍是沒對手的。 (断 20-24)

⑥ 「今個（jinrge）」→「今天」

「明兒（個）」→「明天」

住兩間房的就不多，又塔上今個（→今天）搬來，明兒（→明天）又搬走。

(柳 110-8)

就怕明兒個（→明天）又來一群要路費的。

(上 59-8)

「今兒（個）」・「明兒（個）」は、《例釈》・《詞語》・《匯釈》・《土語》・《兒化》に収められる。《現漢》は、「今兒（個）」を<方言>とし、「明兒（個）」を<口語>とする。いうまでもないが、二つめの例の「明兒個」は、「近い将来」を意味する。

なお、これらの書き換えは地の文に限られ、会話のなかでは「今兒（個）」・「明兒（個）」・

「昨兒個」のままである。

- “昨兒個，前兩天，不是我向諸位弟兄研究過？” (上 50-17)  
“明兒八點兒。” (上 55-5)  
“明兒個去給你老拜年。” (屯 70-4)  
“今兒個有什麼事？” (善 90-3)  
“今兒個早上是，……” (善 90-5)  
“明兒早上來。” (月 131-11)

⑦ 「身框 (shēnkuangr)」 → 「身材」

細條身框 → 細條身材 (犧 42-3)

「身框 (スタイル)」は、《土語》の「身塊兒 (shēnkuair)」の項に引かれる。《岩波》は、「身框兒」を下の2とする。なお、上例の「細條」(xítiao)も「苗條」(《方言》・《土語》)という意の北京語。

⑧ 「閑盤兒」 → 「閑話兒」

大家一天到晚為嘴奔命，沒有工夫扯閑盤兒 (→ 閑話兒)。 (柳 110-10)

「閑盤兒」 (= 「閑事兒」・「閑話兒」) は《例積》・《方言》・《詞語》・《匯積》・《土語》・《兒化》・《難詞》・《漢補》に収められる。《岩波》は下の2。

なお、《例積》・《詞語》・《匯積》・《土語》・《漢補》は「扯閑盤兒」(むだ口をきく)を採る。《駱駝55》では「閑盤兒」のまま。

- 祥子並沒注意老頭子的神氣，他顧不得留神這些閑盤兒。 (42-5)  
他們確是有心“咬”他，撇些閑盤兒，可是並沒預備打架。 (122-10)  
“有事嗎？我忙！”祥子不能再听這些閑盤兒。 (98-3)  
“甬擺閑盤，你怎辦吧？” (127-8)

因に、「閑盤兒」は「閑白兒」・「閑排兒」・「閑篇兒」ともいうが、老舎は「閑篇兒」(《現漢》〈方言〉)も用いている。

然後，直照着朋友在一塊兒喫茶談天的樣子，他扯了些閑篇兒。

〈偷生〉(《老舍文集 第五卷》412-5)

⑨ 「心程 (xīnchengr)」 → 「心思」

我没心程説笑。→我没心思説笑。

(月 144-16)

「心程」は普通「心腸」と表記されるが、老舎は実際の発音 (xīnchang→xīncheng)<sub>(6)</sub>により近い表記として「心程」を用いる。

挨了板子還有什麼心程練刀呢！ <牛天賜伝> (《老舎文集 第二卷》435-6)

好友生死不明，而他自己還有心程給孫子買兔兒爺！

<惶惑> (《老舎文集 第四卷》137-7)

“我没有心程看戲！”

<全家福> (《老舎劇作全集 第三卷》101-17)

ただし、「壞心腸」(《柳》111-25) や「熱心腸兒」(《駱駝55》207-10) の場合は、「心腸」と表記する。

《例釈》・《詞語》・《匯釈》・《難詞》・《漢補》は、老舎の「心程」を採る。《土語》・《兒化》は、「心腸兒」を収めるが、《現漢》にも「心腸」は採られている。

なお、《駱駝55》では「心程」を書き換えていない。

酒在桌上發着辛辣的味兒，他不很愛聞，就是对那些花生似乎心程去動。 (82-5)

⑩ 「真章兒」 → 「真力量」

没(→没有)真章兒(→真力量)，罵罵算得了什麼呢！

(柳 111-21)

「真章兒(事の真相、実力、真価)」は、《語彙》・《方言》・《詞語》・《匯釈》・《土語》・《兒化》・《難詞》(「真扎兒」)・《現漢補》(<方言>)に収める。

⑪ 「子兒」 → 「銅子兒」

可是一個子兒(→銅子兒)没給大嫂。

(屯 75-4)

媽的，公公幾個子兒(→銅子兒)一個。

(柳 112-25)

張二屋裏的陳設大概一共值不了四個子兒(→幾個銅子兒)。

(柳 118-15)

「銅子兒(銅貨)」の意の「子兒」は《詞語》・《兒化》が収めるが、《現漢》にも採られている。《岩波》では「子兒」・「銅子兒」ともに下の1。《例釈》・《匯釈》は「一個子兒(最小単位“一錢”の意)」を採る。

なお、この書き換えは地の文に限られ、会話では「子兒」を改めていない。また、「大子(二分銅貨)」もそのまま。

“美国博士值幾個子兒一枚？” (犧 37-7)  
“不為掙子兒嗎？” (月 145-2)  
天天我看倆大子的晚報。 (柳 111-1)

《駱駝55》では、地の文でも「子兒」のまま。

講究喝十個兒一包的茶葉。 (39-7)  
祥子要了四兩白乾，三個大子兒的落花生。 (82-3)  
一角也罷，四十子兒也罷，大小都有份兒礼金。 (121-5)  
“一個子兒不給。” (130-3)

### 1.1.2 罵語

罵語の改訂については、すでに<「十三篇」の“古董”>に記しておいたが、ここでは北京方言における罵語の書き換えの例を挙げておく。

#### ① 「三孫子」→「孫子」

“文明”是三孫子(→孫子)，還是那句。 (柳 120-21)

「三孫子(くそつたれ、いくじなし)」は《方言》・《詞語》・《匯釈》・《土語》に収められる。同じ意味の「孫子」は《方言》が採る。

なお、上例の“還是那句”の“那句”では「三孫子」のままである。

“文明”是三孫子，話先說在頭裏。 (柳 110-19)

#### ② 「小丫頭子」→「小丫頭片子」

“小丫頭子(小丫頭片子)，有了婆婆家就這麼揚氣，攔着你的！” (屯 80-23)

「小丫頭子(小娘)」は、《詞語》・《匯釈》・《兒化》(「小丫頭兒(=子)」)に収められる。「小丫頭片子」は《詞語》が採る。なお、《匯釈》・《土語》は「丫頭片子」を採り前者は上例を引く。

《岩波》は「小丫頭子」を下の1、「小丫頭片子」を下の4とする。《中日大辭典》は「小丫頭片子」を「小丫頭子」の「すこししゃれた表現」とする。

なお、老舎は「丫頭片子」も用いている。

“那個丫頭片子，比誰也壞！” <離婚> (《老舎文集 第二卷》172-14)

③ 「雜宗 (zázong)」 → 「雜種」

“六六三十六，多要一塊雜宗 (→雜種) ！三十六塊大洋！” (上 62-13)

「雜宗」は、《土語》に「由“雜種”変読」とある。「雜種」は《現漢》にも採られている。  
《岩波》は、「雜宗 (下司め、ろくでなし)」を収める。

因に、老舎は量詞の「種」も実際の発音に近い「宗 (zōng)」<sub>(7)</sub>と表記する場合もある。

哪宗事不是先下手的為強？ (上 53-5)

“善有善報，惡有惡報，並沒有這麼八宗事！” (《駱駝55》207-9)

### 1.1.3 代詞

① 「嗎兒 (már)」 → 「什麼」

除了女人和電影，大概他心裏沒“嗎兒”(→什麼)了。 (犧 27-9)

四十多了，不為自己，還不為兒子留下点嗎兒 (→什麼)？ (上 53-7)

「嗎兒」は《方言》(「嘛兒」)・《匯釈》・《土語》・《兒化》が収めるが、《現漢》にも採られている。

《岩波》は、下の1。

### 1.1.4 形容詞

① 「道地」 → 「地道」

况且，不出声而賤賣，尺大而貨物道地 (→地道)。 (老 126-12)

「道地」は、《詞語》・《匯釈》に収める。《岩波》は下の1。《現漢》は〈方言〉とする。

「地道」は、《例釈》・《方言》・《匯釈》・《土語》に収めるが、《現漢》にも採られる。《岩波》は下の1。

参考までに、初版より「地道」を用いている例を挙げておく。

“神槍沙子龍是我的師傅；玩芸地道！” (斷 18-10)

② 「低塔 (dīdā)」 → 「低賤」

「低得 (dīde)」 → 「低賤／低下」

“你当是咱們低塔 (→低賤) ？” (月 145-14)



剪草皮又怎麼低得 (→低下) ？ (柳 111-5)

我倒不是說拉洋車就低得 (→低賤)，我是說人就不应当拉車。 (柳 112-7)

「低塔」は、《詞語》・《匯釈》・《土語》・《現漢補》に収める。《岩波》は下の1。「低得」を採る辞典はないが、上例からすると、「低塔」の同意語。

③ 「好勁」→「好」

我心裏笑開了，好勁 (→好) 個“人兒”！ (屯 70-8)

「好勁 (まったくひどい)」は、《詞語》・《匯釈》・《土語》に収められる。《岩波》は下の2とする。

④ 「利颯 (lisou)」→「利落」

可是臉上還沒笑利颯 (→利落)，淚就落下來了： (屯 71-6)

「利颯 (機敏である、すっきりしている)」は、普通「利索」と表記されるが、老舎は実際の発音 (lisuo→lisou)<sub>(8)</sub>により近い表記の「利颯」を用いる。この「還沒笑利颯」は、「まだすっかり笑わないうちに」という意。

「利颯」は、《語彙》(「俐叟」)・《例釈》(「利索」)・《方言》(「利索」)・《詞語》・《匯釈》・《土語》に収められる。《岩波》は下の1。

なお、《駱駝55》では「利颯」のまま。

微微輕響的皮輪象陣利颯的小風似的催着地跑，飛快而平穩。 (11-5)

「機敏である」という意では、初版より「利落」も用いている。

誰不曉得沙子龍是短瘦、利落、硬棒，……？ (斷 16-13)

快之中，每個架子都擺得穩、准，利落； (斷 22-20)

### 1.1.5 動詞・動詞連語

① 「喫掛落 (chīguālàor)」→「喫虧」

我知道她是好意，我也知道設若我不肯笑，她也得喫掛落 (→喫虧)，小分酒錢； (月 145-4)

「喫掛落 (巻き添えをくう)」は、《詞語》(「喫掛落兒」)・《土語》(「喫掛絡兒」)・《難詞》・《現

漢補》(〈方言〉)に収められる。

なお、《例釈》・《方言》・《匯釈》・《土語》・《兒化》は「掛落(兒)」を採る。

② 「喫煙」→「吸煙」

周掌櫃臉上要笑出幾個蝴蝶兒來，讓喫煙(→吸煙)，讓喝茶。(老 125-4)

「喫煙」は、《土語》に収められる。《岩波》は下の3とし、「老人のことば」とする。なお、下の例では「喫」のまま。

“給根煙喫喫。”(上 63-18)

③ 「出溜(chūliu)」→「溜」

穿上靴子，出溜(→溜)下來，食指控了鼻孔一下，看了看外面。(馬 96-12)

老舍は1955年末の電影劇本創作講習会で行った報告〈關於文學的語言問題〉<sub>(9)</sub>のなかで、自己の作品における北京土語の一例として、「出溜」について次のように言及している。

我在一本小說中寫一個人“從凳子上‘出溜’下去了”意思是這人突然病了，從凳上滑了下來，一位廣東讀者來信問：“這人溜出去了，怎麼還在屋子裏？”

「出溜」は、《語彙》・《例釈》・《方言》・《詞語》・《土語》・《難詞》に収められるが、上例の「すべる」という意のほかにも、「こどもがよちよち歩く・ふらふら歩きまわる」・「(成績等が)下がる、落ちる、落ち目になる」等を意味する。

《駱駝55》では、「出溜」を「溜」に書き換えたのが一箇所。その他は書き換えていない。

祥子連頭也沒回，像有鬼跟着似的，幾出溜(→溜)便到了團城。(79-13)

老車夫的頭慢慢的往下低，低着低着，全身都出溜下去。(86-15)

大孩子拾煤核回來拿這當作冰場，鬧着打冰出溜玩。(140-4)

④ 「合把」→「合作」

咱們一合把(→合作)，還有什麼不行的事！(上 50-21)

「合把」は《方言》に収められる。《岩波》は下の1(例文「咱們一合把，還有什麼不行呢」を引く)。

⑤ 「唧咕 (jīgu)」 → 「挑撥」

哼，有老二和二妞在旁邊唧咕 (→挑撥) 啊。 (柳 114-7)

「唧咕」は、《例釈》・《方言》・《詞語》(「嘰咕」)・《匯釈》・《土語》に収められるが、《現漢》にも採られる。上例の「唧咕」は、「ブツブツしゃべり」「けしかける」という意。

⑥ 「磨 (mò)」 → 「転動」

一年到頭老是大減價，老懸着煤氣灯，老磨 (→転動) 着留声機。 (老 123-16)

「磨」は《方言》に収められるが、用例は《岩波》(下の1)・《現漢》と同様に「把汽車磨過來(車を折り返す)」を引く。上例の「磨」は蓄音機を「回転させて鳴らす」という意。

⑦ 「拿得住 (勁)」 → 「沈得住 (勁)」

他拿得住 (→沈得住) 勁，走得更慢了。 (上 48-6)

「沈得住」という意の「拿得住」は《岩波》(下の2)が採り、上例(「おちつきはらって歩きかたが一層ゆるくなった」)を引く。

⑧ 「找尋 (zhǎoxin)」 → 「招惹」

他們若不跳出圈去欺侮人，人們也就不敢無故的找尋 (→招惹) 他們，彼此敬而遠之。 (屯 65-14)

「找尋(難しくせをつけて怒らせる)」は、《例釈》・《詞語》・《匯釈》・《土語》に収められるが、《現漢》も〈方言〉として採る。《岩波》は下の1。

なお、書き換えられた「招惹(zhāore)」も《土語》に収められ、《現漢》では〈方言〉とする。

《駱駝55》では、「找尋」のまま。

可是大家三五成群的出来，並沒再找尋他。 (123-4)

⑨ 「坐蠟」 → 「難辦」

“這就來到坐蠟 (→難辦) 的地方了：……” (黒 12-17)

「坐蠟」は、《語彙》・《例釈》・《詞語》・《匯釈》・《土語》に収められる。《岩波》は下の1。

「坐蠟」は、「もと姦通に対する私刑で、肛門に蠟燭をさしこみ坐らせたもの」、「今転じて辛い目にあう意となった。」<sup>(10)</sup>

#### 1.1.4 副詞

##### ① 「乾鏗兒」→「乾脆」

仮如他們乾鏗兒（→乾脆）不回來，像什麼公事？（上 54-23）

「乾鏗兒」は、《方言》（「乾驕兒」・《詞語》・《匯釈》・《土語》・《兒化》）に収められる。《岩波》では下の2。

##### ② 「趕明兒」→「将来」

“趕明兒（→将来）咱倆要來這麼一出話，希望不是你收兵，就是我讓了。”

（黒 2-15）

「趕明兒」は、《例釈》・《詞語》・《匯釈》・《土語》・《兒化》に収められる。《岩波》は、0とする。

なお、《駱駝55》では「趕明兒」のまま。

“趕明兒你找人的時候，先問一聲再拉門！”（206-4）

“趕明兒天大熱起來，……！”（26-12）

“祥子，趕明兒你當了場主，別忘了哥兒們！”（122-1）

##### ③ 「果不其然（guōbùqírán (-r))」→「果然」

果不其然（→果然），張二一回來就聽說了，自己的媳婦惹了禍。（柳 117-17）

「果不其然」は、《語彙》（「果不其然的」）・《例釈》・《方言》・《詞語》・《土語》・《兒化》（「果不其然兒」；“也說成‘果不其然’”）に収めるが、《現漢》にも収められる。《岩波》では、「果不其然」を0、「果然」を上上の1とする。

《駱駝55》では、「果不其然」のまま。

“我就早知道嗎，他一跑起來就不顧命，早晚是得出點岔兒。果不其然！”（62-3）

④ 「緊自 (jǐnzi)」 → 「緊」

他緊自 (→緊) 這麼笑，鬧得我有点發毛咕。(犧 38-22)

「緊自」は、《語彙》・《例釈》・《詞語》・《土語》に収められる。廢開第<sup>(11)</sup>は、北京口語副詞 (= 「一個勁兒的 (しきりに)」) とする。《岩波》は下の1。

ただし、会話では「緊自」のまま。

“緊自蹲着耳機幹什麼呀！” (且 167-9)

《駱駝55》も「緊自」のまま。

“別緊自蹲着，說話呀！你起來！” (76-6)

⑤ 「自要」 → 「只要」

他知道，自要 (→只要) 有口氣，憑他的經驗与知惠，就是坐在那兒呼吸呼吸，也应当有政治的作用。(且 156-5)

「自要」は、《例釈》・《匯釈》に収められる。《土語》は「只要」を (zìyào) とするただし、《老舍短編小說選》におけるこの書き換えは上例のみで、他は「自要」のまま。

洋人也好，中國人也好，不論是誰，自要給他事作，他就应当去擁護。(且 156-10)

“自要進來，開槍，我告訴你！” (且 169-21)

我心裏說，自要你直接沖鋒，我便不接碴兒，咱們是心裏的勁！(屯 83-8)

《駱駝55》でも「自要」のまま。

“自要一上了便道，咱們就算有点底兒了！” (14-12)

自要老天保佑他，什麼也不必怕。(24-11)

なお、この「自要」→「只要」の書き換えは、《老舍選集》(1951・12 2版)でも一箇所ある。

“自要 (→只要) 不分家，便也沒什麼可怕的了。” (黒 10-5)

⑥ 「坐窩兒」 → 「堵窩兒」

坐窩兒掏！→堵窩兒掏！ (上 60-1)

「坐窩兒」は、《例釈》・《方言》・《詞語》・《匯釈》・《土語》・《兒化》・《難詞》に収められるが、「本来、原来、壓根兒」や「正当、馬上、就地」という意。

《岩波》は、下の1とし、「坐窩兒掬」（ねこそぎ捕らえる）を引く。

なお、「堵窩兒掬」は《土語》に収められる。

## 1.2 注釈を付けた北京方言語彙

老舎は、《老舎短編小説選》の〈後記〉において「幾らかの北京土語は改めがたいので簡単な注釈を付けておいた」と言うが、注釈の量という点では、《駱駝55》に比べて非常に少ない。

注釈が付された語彙は以下の通り。

- ① 「蓮花白」：酒名。
- ② 「管理兒的」：→ 1.1.1. 名詞②
- ③ 「虚子」：精明、講場面、有経験の人。 《方言》・《詞語》
- ④ 「踩窩子」：探查賊巢。 《方言》
- ⑤ 「不喫勁 (bùchījìn)」：「不在乎，没關係」 《例釈》・《詞語》・《匯釈》・《土語》
- ⑥ 「卷 (juǎn)」：「罵」 《例釈》・《方言》・《詞語》・《匯釈》・《難詞》
- ⑦ 「撞客」：神志昏迷，哭鬧，說胡話，老迷信說是撞見鬼了。《難詞》・《現漢補》
- ⑧ 「碰了個軟的」：「碰了個軟釘子」 《土語》（「碰子」＝「碰釘子」）
- ⑨ 「光頭三」：死了人，在第三天上念經超度。
- ⑩ 「招兒」：「注意」 《例釈》・《詞語》（「着兒」）・《匯釈》・《兒化》

①・⑨はともかく、②・③・④・⑦はたしかに他のことばに「改めがたい北京土語」であるが、⑤・⑥・⑧・⑩は表現上「改めがたい北京土語」のようである。

## 1.3 “ ” が挿入された北京方言語彙

《老舎短編小説選》には、“ ” を挿入するという改訂がいくらかみえるが、そのなかで北京方言語彙に“ ” を挿入したと思われるものが三例ある。

① 「黒棗 (hēizǎo)」 → 「“黒棗”」

嘗個黒棗→嘗個“黒棗” (上 51-13)

喫黒棗→喫“黒棗” (上 53-3・4、59-7、62-18)

「拳銃の弾」を意味する「黒棗兒」は《例釈》・《匯釈》・《土語》(＜旧京土語＞)・《兒化》・《現漢補》に収められる。《例釈》・《匯釈》は、「喫黒棗兒」も採る。

ただし、「黒棗 (兒)」は北京方言語彙というよりは、「匪徒」の＜隠語＞とするのがよいのかもしれない。

《駱駝55》では、“ ”が挿入されていない。

“咱們不招誰不惹誰的，臨完上天橋喫黒棗，冤不冤？” (98-13)

② 「猫尿 (māo(r)niào)」 → 「“猫尿”」

他的嘴也不善，喝倆銅子的猫尿 (→ “～”) 能把全院的人說暈了； (柳 111-24)

「対酒の悪称」である「猫尿」は《例釈》・《方言》・《詞語》・《匯釈》・《土語》・《兒化》・《難詞》に収められる。

③ 「腰裏硬 (yāoliying)」 → 「“腰裏硬”」

他脫了小褂，緊了緊深月白色的腰裏硬 (→ “～”)，把肚子殺進去。 (断 18-13)

從腰裏硬 (→ “～”) 裏掏出皮夾來，点了六張十塊的； (上 58-21)

「腰裏硬 (木綿の幅の広いバンド)」は、《土語》に収められる。《岩波》は下の1。

## 2. おわりに

以上が《老舍短編小説選》における北京方言語彙の改訂の例である。

作品別にみると、＜柳家大院＞と＜上任＞、それに次いで＜柳屯的＞に書き換えが多くみられた。また、＜微神＞・＜善人＞・＜不成問題的問題＞では、北京方言語彙に関する改訂がみられない。この結果は、各作品の北京語への傾斜の度合いをある程度反映しているといえることができる。

北京方言語彙についていうならば、《駱駝55》では注釈に重きが置かれていたのに対し《老舍短編小説選》では、かなり意識的に書き換えが行われたといえる。

ただ、これらの北京方言語彙の書き換えの多くは地の文に限られていた。しかもその書き換えが機械的なものではなく、ある場合には不統一な場合もあった。また、書き換えられた

語彙が普遍性の強い「普通話」でない例もみられた。これらの改訂は、たしかに「漢語規範化」を反映したものであるとはいえ、やはり表現における推敲を重ねたうえでの書き換えであったといつてよい。そして、そこに老舎の自己の作品に対する思いをみてとることができる。老舎は、たしかに方言語彙の乱用は戒めているものの、その反面方言語彙の持つ表現力の豊かさも強調している。しかも自身が用いた方言語彙は洗練されたものであると自負する老舎である。北京方言語彙とはいえ、それらをことさらに「普通話」に書き換える必要性を老舎は感じなかったはずである。

老舎は「全国文字改革会議」の席上次のような発言を行っている。

以前の作品では、わたしはたしかに「普通話」を用いた。これは、わたしのすぐれたところである。(12)

南方出身の作家が「漢語規範化運動」に対して危機感すらもって臨んだのに比べ、上の発言からも、北京人老舎のことばに対する絶対的な優越感をみてとることができる。

なお、《老舎短編小説選》においては、北京方言語彙に関わるもの以外にも多くの改訂がなされていることを最後に繰り返し指摘しておきたい。語彙の書き換えだけでも150例近くにも及ぶが、これらについては別稿にて取り上げることにする。

[付記] 本稿は、平成2年度特別研究費「北京方言語彙の研究」による研究成果の一部である。

#### 〈注〉

- (1) 「漢語規範化運動」に関する活動としては、「電影劇本創作講習会」（1955年末）と「全国青年文学創作者会議」（1956年3月26日～29日）で、「漢語規範化」に関する報告（「關於文学的語言問題」・「關於語言規範化」）を行っている。また、「漢語規範化」に関する文章として、〈擁護文字改革和推广普通話——漢民族共同語〉（《北京日報》1955・10・25）・〈大力推广普通話〉（《人民日報》1955・10・31）等がある。
- (2) 陳建民は、「三十年代，副詞、形容詞修飾動詞要加“的（地）”的情况比較普遍」（《漢語口語》1984・12北京出版社 p49）という。《老舎短編小説選》では、この「的」の削除が25例にも及ぶ。
- (3) 十三篇のテキストとしては、他に晨光出版公司出版の《微神集》（1947）・《月牙集》（1948）と開明書店出版の《老舎選集》（1951年）等があり、それらにおいても若干の北京方言語彙の書き換えが行われているが、ここでは取り上げない。例えば《老舎選集》では〈月牙兒〉のなかの「遲累（chílei）」を「連累」書き改めている。《老舎短編小説選》でもそのまま「連累」（月 136-21）としている。
- (4) この書に関しては従来あまり取り上げられたことがないが、版權代表者が「中華全国文芸協会」であり、老舎の許可を得て出版されたものである。
- (5) ただし、「打墊」→「打点」や「婆婆慢慢」→「婆婆媽媽」等の表記上の書き換えは取り上げないことにする。
- (6) 李榮〈漢字演变的幾個趨勢〉（《中国語文》1980年第1期）と陳剛〈北京話里輕声音節的異變〉（《語文研究》1986年第4期）を参照。
- (7) 俞敏〈漢語裏的一種新型的“鋪盖卷兒詞”（portmanteau word）〉（《語文研究》1988年第3期）を参照。



- (8) 注(6)の陳剛論文参照。老舍は「利颯」同様に、「摳搜 (kōusou)」「摸搜 (mōsou)」とも表記する。なお、《駱駝55》では、「摸搜」→「摸索」(182-9)とするが、「摳搜」はそのまま(170-9)。
- (9) 《福星集》(1958・5 北京出版社) 所収による。
- (10) 鳥居久靖・太田辰夫訳注《龍鬚溝》(1957・5・19 江南書院) p33「坐蠟」の注。
- (11) <《駱駝祥子》語言的兩大特色> (《中国語文》1982年第5期)。
- (12) <我擁護漢民族共同語的推行> (《普通話論集》1956・12 文字改革出版社 p65)